都藝泥布

京都地名研究会　会報　第 67 号

令和元年 9 月 28 日発行

題字「つぎねふ」（山城の枕詞）

揮毫　吉田 金彦氏 （本会名誉会長）

編集　京都地名研究会事務局

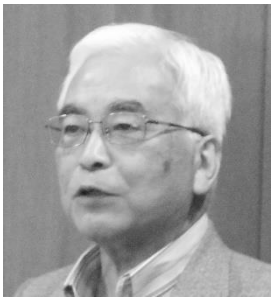
第 52 回地名フォーラム報告

2019 年 7 月 28 日（日）、龍谷大学大宮学舎で、第 52 回地名フォーラムが開催されました。龍谷大学様のご都合で会場を東黌から清和館の大ホールに変更しました。

開会挨拶では、小西宏之理事が、魅力あるフォーラムの改革に取り組んでいる本会の取り組みに対し、会員のいっそうの理解と協力を呼びかけました。

参加者は会員 26 名、一般 9 名、計 35 名でした。司会は入江理事が務めました。

発表 1　縄文アニミズムと人体地名例について
～梅原猛先生を偲んで～
永田　良茂　氏（本会会員）



（永田良茂氏）

「人文知の巨人」と呼ばれた梅原先生が亡くなられた。自分が地名に取り組んだのは梅原仮説と自ら称された、「アイヌ語は縄文語を引き継いだ。」を何となく証明できると思えたからであった。

E.B.タイラーは原始社会の宗教観として、自然の恐怖と畏敬の念から生じる「自然は生きている」とする考え方を「アニミズム」と称した。知里真志保は『アイヌ語入門』の中で、古いアイヌの考え方として、「川を人間同様の生物と考え、人の体と同じ言葉で呼んだ。」、また「山も同様である。」と残している。

地名は元々当時の人々の簡易な言葉で表された。縄文時代の上記のような考え方を縄文アニミズムと呼ぶと、日本語では分からないがアイヌ語による人体語として語源分析すると分かる人体語地名が各地に豊富にあることがわかる。縄文人の名付けた縄文アニミズムにもとづく人体語地名が梅原仮説の正しいことを示し、多くのアイヌ語による人体語地名を見いだすことができる。

以前、日本語語源研究会で「川に関する地名」、「鼻に関する地名」を発表したのでこれらは結論のみ報告し、「頭に関する地名」の例を主に示し、「お尻」や「アゴ」や「文型としての人体語形式の地名」の例なども示した。京都の地名から「音羽（山）」、「比叡（山）」や「愛宕（山）」も人体語と関係する。『大鏡』に百鬼夜行が現れる「アハハの辻」の「アハハ」もアイヌ語 apa/apaha であり、当時まで縄文の言葉が残されていたことを示しているのである。

発表 2　環濠集落と地名
～南山城の場合～
岩田　貢　氏（本会理事）

（岩田　貢氏）

の大部分を占める木津川流域では、沖積地に環濠集落が多くみられる。環濠集落とは、「中世の防御的集落で、堀（濠）を掘り内側に土塁を築き村落を環状に取り囲んだもの・・・弥生時代～古墳時代の集落遺跡としての環濠集落とは区別されている（岩田･山脇『地図でみる京都―知られざる町の姿

―』より)」と説明される。さらに環濠集落には，条里地割に沿う道や丁字形・袋小路などがみられる点や、集落外に通じる道が東西南北の四方か三方かに限定されることなどの特徴がある。加えて、各集落付近には「口」・「浦」・「土井」・「代(だい)」・「城」・「堀」等が付く小字名が多くみられる。『大言海』においては、例えば「浦」は「裏」の義で「裏」には「背後(ウシロ)・後方(シリヘ)」、「土井」が「土居」だとすれば「城ノ周(メグリ)ノ土ノ垣」、さらに「だい代」を「代(しろ)」と読めば「田ヲ作ルベク、墾(は)リシ土地」であるとの解釈がみられる。いずれも集落立地と開墾とに関する地名や、土塁に関連する地名と思われ、集落がもつ先掲の特徴と深い関わりが想像できる。

発表では、環濠集落とされる八幡市の川口・戸津(とうづ)・内里(うちざと)，城陽市の寺田・平川および久御山町の佐古・佐山等を取り上げ、地図や現地写真を基に集落に現存する堀（濠）の遺構や丁字路など道路の現況とそれらの共通性をみることにする。また、これら環濠集落にみられるとされる景観の特徴や地名を研究する場合、検討すべき課題が様々に考えられることから、これらに対する私見も述べた。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

第 53 回　地名フォーラム開催案内

2019 年 10 月 27 日（日）

13：30～開始

宇治市生涯学習センター　1 階第二ホール

京都京阪バス 琵琶台口停留所すぐ JR 宇治駅から

徒歩約 15 分 京阪宇治駅から徒歩約 25 分

※必ず公共交通機関をご利用ください。

電話: 0774-39-9500（直通）

第一部

発表　　小寺　慶昭氏　本会会長

龍谷大学名誉教授

発表テーマ　「二つの許波多(こはた）神社」

〈発表要旨〉

宇治市内には、木幡地区と五ヶ庄地区に、それぞれ許波多神社が鎮座している。両社とも戦前は郷社で、式内社に認定されており、藤原鎌足による創建との社伝を持っている。

江戸時代にはいずれも「柳大明神」と呼ばれていた。社名の由来は壬申の乱に遡る。瀕死の床にいる天智天皇から皇位継承の依頼を受けた大海人皇子は、身の危険を感じ、仏道修行を理由に辞退する。大津の宮から吉野山へ向かう途中、皇子が、許波多神社の瑞垣に柳の鞭を挿し込み、「吾能く本懐を成就せば此柳萌芽して成長す可し」と祈願したところ、神意に叶い、壬申の乱を征し、天武天皇となる。柳の鞭も根付き、繁茂した(柳の鞭伝承)。そのため「柳大明神」と名付けられたとする。かつては大和田の地(現在の黄檗山万福寺の南隣）に鎮座していたが、遷座して現在の二社になったとするのが通説である。

しかし、不思議な事に、柳の鞭伝承は江戸時代に多く出版された「名所記」には出てこない。そもそも大海人皇子は許波多神社の社前を通ったのか？　なぜ許波多神社でなければならなかったのか？　柳の鞭伝承の元となったのは何か？　なぜ柳大明神が遷座後に許波多神社と名称を変えたのか？

許波多神社が二社鎮座している謎を、「木幡」という地名を絡めて考えていきたい。

〈発表者略歴〉

1948 年、京都市生まれ。

京都教育大学卒業後、中学校教員(国語科) 等を経て、2013 年に龍谷大学を退職。

現在、龍谷大学名誉教授

著書に『狛犬学事始』『京都狛犬巡り』『大阪狛犬の謎』(以上ナカニシヤ出版)、共著に『京都学を楽しむ』(勉誠出版)、『地名が語る京都の歴史』(東京堂出版）他。

第二部

講演　　杉本　　宏氏

　　京都造形芸術大学　歴史遺産学科教授

演題　浄妙寺発掘と藤原道長墓

　要旨

　ＪＲ奈良線六地蔵駅から東へ七・八分歩くと、丘陵裾に宇治市木幡小学校がある。藤原道長が寛弘２年（1005）に創建した浄妙寺跡はこの小学校の校庭に埋もれている。寺跡が発見されたのは昭和 42 年、小学校建設に伴う試掘調査によってである。浄妙寺は創建後、藤原一門を供養する寺として藤原氏の庇護のもとに発展するが、寛正３年（1462）の徳政一揆により放火される記事を最後に記録から途絶え、その確かな場所もわからなくなっていた。小学校建設に伴う試掘がなぜ行われたかは、近くに「ジョウメンジバカ」と呼ばれた村の墓があること、また墓の南に「堂の川」が流れ、記録から川の北に寺が造られたことが理解できたからである。地名と地形からの推定であった。

　浄妙寺はその後、宇治市教育委員会によって発掘調査が行われ、徐々にその全体像が明らかとなっており、現状では概ね当時の寺域と主要堂塔の位置が明確になっている。この実態判明により、長らく不明であった歴史の謎に、具体的に迫れる手がかりが得られることとなった。藤原道長墓の場所である。浄妙寺は道長が、藤原氏一門が眠る藤原氏木幡墓所に隣接して建立した寺であり、建立者道長自身も木幡墓所に埋葬されている。そこへの行き方は当時の記録に見えるが、起点となるべき地点は浄妙寺の門・堂塔等として書かれている。すなわち、この具体的な場所が発掘で明らかとなってきた今日、藤原道長墓の場所推定は一定の精度で可能となっている。講演では、浄妙寺の発掘の経過を踏まえ、藤原道長墓の場所推定をしてみたい。

〈講演者略歴〉

京都造形芸術大学　芸術学部　歴史遺産学科　教授

専門　　日本考古学、特に平安期浄土庭園。文化的景観学。

昭和 31 年　愛知県生まれ

昭和 56 年　龍谷大学文学部歴史学科卒

平成 29 年　宇治市役所定年退職

　　同年　　京都造形芸術大学　日本庭園・歴史遺産研究センター　客員研究員

平成 30 年から現職

京都地名研究会主催

2019 年度　第二回京都地名ウォーク

テーマ「仏教の祖師の遺跡めぐり」

案内　　本会理事　小西宏之氏

日時　2019 年１１月２日（日曜日）10 時開始

下京区周辺　２時間

午前　9:30 受付開始　佛光寺　門内　集合

出席確認　非会員費用徴収

会員　　無料

非会員　500 円（資料代）

挨拶　注意事項説明

（参加申し込み方法）

　必ず事前にお申し込みください。

　お問合わせ先　下記入江まで

氏名・年齢・性別・参加人数を e-mail、またはお電話でお願いします。

Ｅ-mail：kyotochimei@gmail.com

　Tel　　090-6916-6837

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

■地名ものがたり■リレー連載３

小町通り（上京区一条通堀川東入る）

野村　倫子

　一条通り、堀川通りと油小路通りの間の細い道の北西の角に「小町通り」と南向きに示し、東向きの右側面に「小野小町双紙洗水遺跡」とする高さ 40

～50 センチの石碑がある。その「小町通り」の北端は丁字路になっており、南東角には、西側右側面に「小町通り」、北面に「新武者小路」とした石柱があり、「小町通り」の南北両端を示すように対応している。

もともと、謡曲の「双紙洗（小町）」自体が、紀貫之と小町が同席する荒唐無稽な設定で、舞台となった平安京内裏の清涼殿は当地の遙か西に位置していた。平安京の外部のこの地が、なぜ「小町通」と呼ばれるようになったのか、京都叢書の管見の範囲でまとめてみた。

まず小町と井戸の関係である。大正 7 年（1918）、非売品であるが東京で発行された『旧都巡遊記稿』の「小町草子洗井戸」の項には、「一条戻橋の東にあり近衛家の旧邸なり」と存在を認めているが、先の同五年に刊行された碓井小三郎編集の『京都坊目誌』では、「小町ノ塔」の項に「同所（前項「清和水」・「下り松」ともに「一条堀川東北角」とする）にあり。名所誌に小町が双紙洗ふことあり。此所の清和水を汲んで。彼真偽を正す故に後人此塔を立て証と為すと。今荒廃して。蔓草に埋没す。双紙洗は謡曲より出るもの素より無稽に属す。」（上京第八学区之部）と、全面否定されていた。本文のほとんどが『山州名跡志』（正徳元年（1711）、沙門白慧撰）と同文だが、「名跡志」は「塔古代ノ体ナリ」と記載し、「清和水」については「佐良志野清水」（これも月を愛でるのに相応しいという「更級」の見立てらしい）の異称を記す。その後の『都名所図会』（安永 9 年（1780）、秋里籬島）は、「小野小町双紙洗の水」の項に「清和水」の別名を示す。先の旧近衛邸の他、名所記の類いには「大名屋敷」、「諸侯屋敷」と所在地がさまざまに書かれるので、屋敷内の庭園の景物、仮託であった可能性が高く、「道」といっても庭園内の通路であった可能性がある。宮永眞弓氏『散花散文』（角川書店、昭和 61 年（1986））では、当時８０代の住民の話からも「小町双紙洗いの井戸はずいぶん前にすっぽり閉じられて仕舞」ったとあり、痕跡はない。

ところで、「小町通」は、下長者町通りから一条通りに至る南北の「突き抜け」松の下の延長であり、公道の認識はあやうく、さらに石碑に示された「新武者小路」は、現在使用されていない。同所の西辺りは「東堀川通り一条上る東入る」と表示され、貞享３年（1686）版の「大図絵」に見える「富田辻」が、町名「竪富田町」に残されているようである。データベースによれば、昭和 10 年の地図（立命館大学：近代京都オーバーレイマップ）では西川端町の一部が路地のように一条通から北に入り込んでいるが、北の道路までは抜けきっていない。昭和 26 年（同）、1961～1964 の地図（埼玉大学谷謙二研究室：今昔マップ）は明らかに道路として扱っているが、「今昔マップ」の方はその後公道として扱われず、地図上の白い通路は消える。私道という解釈によるのであろうか。

「小町通」は謡曲の仮構の上に重ねられた、風流の産物といえようか。（了）

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

地名随想

祇園祭山鉾町が町名に山鉾名をつけない理由

小西　宏之（本会副会長）

祇園祭の山鉾をだしている町の町民は、ひじょうに誇らしい意識をもつている。当然町名には山鉾名をつけたと考える。ところが山鉾町 33 町のうち 12 町(36.4%)が、山鉾の名を町名としなかった。それほどの重要性がその命名にあったのだろうか。

前祭	通りの位置	町名
放下鉾	新町通四条上ル	小結棚町
綾傘鉾	綾小路通室町西入ル	善長寺町
拍子山	綾小路通新町西入ル	矢田町
油天神山	油小路通仏小路上ル	風早町◆
保昌山	東洞院通松原上ル	燈籠町
後祭	通りの位置	町名
鈴鹿山	烏丸通三条下ル	場之町
八幡山	新町通三条下ル	三条町
黒主山	室町通三条下ル	烏帽子屋町
浄妙山	六角通烏丸西入ル	骨屋町
北観音山	新町通六角下ル	六角町
南観音山	新町通錦小路上ル	百足屋町
大船鉾	新町通四条下ル	四条町

山鉾名よりも重要と考えられて命名された町名を由来別に整理してみる。

（1）寺

寺は精神的なよりどころとして印象に残り、移転した後も存在を主張することになる。

a. 善長寺町の北側にあった浄土宗善長寺は永正のはじめ(1500 年初頭)に僧顯興忍想(けんこうにんそう)が越前から上京して創設した。現在は京極蛸薬師の南にある。

b. 矢田町の矢田寺は承和12年(845)に僧満米(まんまい)が大和国に矢田山金剛寺を創建し、いつの頃か本尊の地蔵尊を同じ地蔵尊の像を安置し、矢田寺と名付けた。お盆の珍皇寺のお迎えの鐘に対し、今は、忘れられてしまったが、お送りの鐘がある。

c. 燈籠町の東側にあった燈篭堂は、平重盛が無量寿経の「法蔵菩薩の四十八願」にちなんで、1 間ごとに 48 の燈籠を釣り、貴族の女性を集めて念仏を唱えさせた故事による。寺は浄教寺で今寺町通四条下ル東側に移転したが、境内をホテルに改築中で、燈籠堂は見る影もない。

(注)これらの寺はすべて、天正 18～19 年に、豊臣秀吉によって寺町に移転させられたものである。

（2）多くの匠の住居と豪商の大店の屋号匠や豪商の財力は山鉾の維持の基盤であり、これがあってこそ山鉾が出せるという誇りの町名である。

a.小結棚町は『京羽二重織留』に「小結(こゆい)えぼしを造るもの　いにしえ新町四条にあり　その所を小結の棚と云う」とあり、町名は小結烏帽子を小結と略したもので、現在は「こむすびたなちょう」と称している。

b. 烏帽子屋町も「烏帽子屋が多く居住(『京町鑑』)」し、その他、江戸・大阪呉服問屋、糸割符商人、などが集中して居住していた。それらの財力の誇りである。

ｃ.場之町は室町時代に足利氏の京都奉行所があった関係で、「宿駅里程標」を設置していた。現在も烏丸三条東南角の京都銀行前に立つ。『京町鑑』と『京羽二重』によると「馬借(馬による運送業者)が多く居住」しており、この里程標によって運賃を決めていた。場之町の場は、宿場の場でもあり、元禄の頃

に「馬の丁」といっていたことからも、馬と場の同音からの使用といえる。流通経済の重要性からの命名である。

ｄ.骨屋町は俵屋宗達の工房に代表される扇の骨を商う店、百足屋町には百足屋に代表される大店があり、また、尾張中納言の京屋敷があり、その呉服所でもある京都三長者の茶屋四郎次郎の邸宅があったなど、両町とも商業の盛んな財力を誇る町であった。

(3)町や通りの財力を意識し、自町の誇りと、北の通りの繁栄と関連を意識する命名である。必ず自町の北の通りの名をつけるのが慣習であった。

a. 三条町は町の北に三条通がある。祇園社の神人として綿座、小袖座、米座、袴座、堀川材木座などの居住があった。

b. 六角町は室町中期に、「東側三丈八尺は「祇園社領」とし、その町名を六角町と記している(祇園社記)」。祇園社を誇りにするとともに、豪商の越後屋(三都の両替店の三井本店)の誇りがあった。

c. 四条町はとくに、室町時代に、四条通の室町西に市が立ち絹布以下諸物を売る(『師守記』)とあり、新町西には元亀２年(1571)に「革棚町」とでている(フロイス日本史も言及)。当町近辺に切革の店が立ち並んでいたという。四条室町、四条新町の商業的な繁栄を誇りにする命名である。

(注)通り名を町名にするのは、商工業の経済の中心という誇りによる命名といえる。◆油天神山をだす風早町は、町にあった風早邸にあった菅原道真の天神像を山の神体としているので、山鉾名を冠する町名に準ずる。

連載

梅原氏のアイヌ語論（１）

本会会長　小寺　慶昭

去る７月 28 日開催の「第 52 回地名フォーラム」での永田良茂氏の発表(詳細は別項参照）で、愛宕山について「アタゴはアイヌ語で“たんこぶ”を表すｔａｐｋｏｐが語源で、人称接頭語ａが前について“我らが・タンコブ山”の意味である」と述べられた。愛宕山の語源については多数の説があるが、昨年度に京都新聞に連載した「地名ものがたり」でも、「古代の愛宕(オタギ）郡や元愛宕との関係も謎に包まれ、地名研究の大きな課題になっています」としか書けなかった難問である。ところが「たんこぶ山」と理解すると、愛宕神社の鎮座する頂上部の山容を見事に表現した解釈であり、「アイヌ語でうまく説明出来るものだなぁ」と、感動すら覚えてしまったのであった。

なお、当日会場から質問の出ていた丹後山は、新潟県と群馬県との県境にある秘境の山で、標高 1809 m。『新日本山岳誌』(日本山岳会編・ナカニシヤ出版）によると、群馬県側の丹後沢や丹後小洞(こぼら）に由来する山名となっている。また「幅の広い高原のような山頂」で知られた山で、こちらは「たんこぶ」では説明出来ない。元来、日本語のたんこぶは「タン＋コブ」であるはずで、アイヌ語のｔａｐｋｏｐが複合語であるとの説明がないならば、比較する事に意味があるのかどうか？

日本にアイヌ語地名があるのかどうか？　当然答えは「ある」。問題は、東北北部以北と限定するか、

全国にあると見るかである(近年、筒井功氏が『アイヌ語地名と日本列島人が来た道』〈河出書房新社〉で南限について実証的に論考しておられるので、是非参照されたい)。永田氏の発表のお陰でアイヌ語地名について考える機会を頂いたのは大変有難い事である。ただ、議論を噛み合わせなければ、互いに益する事が少なく徒労に終わってしまう。今必要なのは、議論するための論点の整理ではないか。そこで、永田氏が、梅原猛氏の「アイヌ語は縄文語を引き継いだ」との仮説を証明する立場であると表明されていることから、梅原説そのものを理解する必要があると感じた次第である。

勿論、膨大な梅原説を検討する力量など私には全く備わっていないので、一番の疑問点に絞る。縄文人がアイヌ語を話していたと仮定した時、それがなぜ伝わってきたのかという疑問である。具体的には、大内裏の巽の辻を「アハハ(の辻)」と名付けたのが、藤原師輔が百鬼夜行に会った時代だとすれば、当時の大宮人はアイヌ語を使っていた事になる。古代から伝わっていたとすれば、数千年の時を超えて誰が伝えてきたのかという問題である。このことについて梅原氏はどう考えていたのか。

梅原氏のアイヌ語への関心は、1979 年に北海道開拓記念館を訪れた時、藤村久和氏から渡された報告書から始まる。アイヌ語のカムイ・ピト・イノッなどの霊に関わる語が日本語と密接な関係が認められることから「アイヌ語が日本語の祖語ではないか」との着想を得て、三か月後の「天城シンポジウム」で「古代日本語とアイヌ語」との提論を行う。また、翌年に刊行された時に加えられた「提論後記」とを併せて読むと、ほぼ次のようである。紀元前三世紀頃、圧倒的に少数だった弥生人達がアイヌ語を話す縄文人達を「征服」する時、彼らは混血を促し「原住民の言葉を優先」した。「この混乱のなかから現日本語が生まれた」。混血した民族が日本を統一し、「固有日本土着の人々は北と南に追われ」「琉球とアイヌ」になった。この部分だけで判断すれば、弥生人も「アイヌ語を優先した言葉」を話していたとなるが、言語を「優先する」とはどうすることなのか。そもそも「征服」とは、被征服民族に「神とことば(この二つは切り離せない概念)」を押し付けることが世界史の常識であり、その逆など聞いた事がないのだが･･･。　　(つづく)

○●受贈図書及び資料●○

◇「ニュースレター熊本乃地名」

第 213～215　号（2019 年 7 月～9 月刊）

熊本地名研究会　　発行

◇『地方史情報』139 号（2019 年 9 月刊）

☆冊子版の発行　終刊

「岩田書院・図書目録」（2019 年版）

以上**岩田書院**

◇北斗書房ニュースレター想いのカタチ　夏・秋号

北斗書房　波多野茂男様より

（お送りくださった関係機関に感謝いたします）

□ 会員出版物等・紹介 □

許●（竹冠に封、ホ・ボン）作

梅山秀幸　訳

（本会理事）

本体 3,800 円

ISBN978-4-86182-774-7

2019 年 9 月発行

【内容】作品社 HP より引用

豊臣秀吉との駆け引き、清の太宗による半島侵出、蹂躙される国土、虐殺される民衆――しかし、宮廷内部は、権力闘争に明け暮れていた。《韓国古典・野譚シリーズ》全 8 巻完結！

本書は、16 世紀・朝鮮中期にまとめられた、李朝の歴代の王たちと、その時代を活き活きと記した“史書”である。建国の英雄としての王、兄弟たちを殺し尽くした王、英邁で文化的な啓蒙君主、暗愚極まりもない女色と殺人を趣味とした王……。両班たちは、その王たちのもとでどのように生き、死んだか。まるで『史記』を読むような面白さで、朝鮮の前期の歴史が描かれ、東アジアの中での朝鮮という国家の成り立ちと、民族のアイデンティティが描かれる。

梅山秀幸訳《韓国古典・野譚シリーズ》

全 8 巻完結

「野譚」とは、16-17 世紀の李氏朝鮮で書き残された広く民衆に伝わる説話や伝承で、本シリーズの作品は代表作である。貴族･僧から庶民までの、世態･風俗、人情の機微が描かれ、朝鮮の心の基層をなす物語々の源がここにあり、韓流歴史ドラマの原点でもある。ほとんどが本邦初訳であり、朝鮮の豊穣な文学世界についての日本人の認識の欠落を埋める待望のシリーズの完結である。

当研究会のホームページをご覧下さい

Yahoo などで「京都地名研究会」と入力するとメニューがヒットします。各種情報を定期的に更新できるよう努めます。「コンタクト」のページから当研究会への要望や意見を書き込むことができますので、ぜひご活用ください。

会費納入の依頼

今年度、または今年度を含む過年度の会費が未納の方は至急納入方、よろしくお願いします。

納入状況のお問い合わせは事務局まで。

編集後記

梅山秀幸理事の《韓国古典・野譚シリーズ》全 8 巻が完結した。まさに偉業である。戦後最悪と言われる日韓関係だが、この本は改めて歴史の中で現在の不幸を浮き彫りにする。圧政と侵略に苦しんだ韓国民衆の息づかいが聞こえてくるようだ。相も変わらず私たちは歴史から学ぶことができないでいる。（い）

京都地名研究会への入会案内

千年の都、京都。ここを起点として近畿から国の内外に及び地名を広く細かく蒐集し、比較調査して、地名を学ぶ学会です。地名は歴史の鏡であり、文化を盛る器です。私たちの暮らしのもとにある地名に目を向けて、日本の文化と歴史認識をいっそう深め、地域の知的活性化に役立ちたいと念じます。年齢、職業などの如何を問わず、いつでも、どなたでも、地名文化に関心をもたれる方々のご参加を歓迎し、ご協力もお願いします。入会金不要。

年会費	3000 円
賛助会員・理事	5000 円
家族会員	1000 円

事務局　お問い合わせ先

京都地名研究会事務局　入江　成治

610-1126 京都市西京区大原野上里男鹿町 14-5

Tel　090-6916-6837　fax　075-331-3431

E-mail：kyotochimei@gmail.com